

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和四十八年十二月二十五日印刷 昭和四十九年一月一日発行



1974

第四十卷

第一号





目次

表紙『とら』松涛達文画

〈年頭によせて〉

開宗八百年の歳を迎えて……………岸 信宏……………(1)

元祖法然上人に迫る年……………林 靈法……………(5)

年頭所感……………宮 本文哲……………(8)

お参りしない仏壇……………石 井 真 峯……………(9)

開宗八百年の新年を迎えて……………一 条 智 光……………(11)

〈新春対談〉 — 開宗八百年によせて —

法然上人の念仏信仰と現代……………鶴飼隆玄×紀野一義……………(14)

虎年を迎える……………安 居 香 山……………(20)

選訳集講話⑫ 釈尊もただ念仏する人のみを讃う

大谷 旭 雄……………(23)

信仰と幸福……………藤 原 明 勲……………(26)

念仏・人と歴史⑫ 福田行誠上人……………大 橋 俊 雄……………(28)

年 頭 に よ せ て

八百年の歳を迎えて

浄土門主 岸 信 宏



昭和四十九年の元旦を迎えまして大慶に存じます。本年は浄土宗門人が、道俗共に久しくお待ち申し上げて居りました歳であります。それは申すまでもなく、我が宗祖法然上人が八十年の御生涯の中、四十三歳の承安五年春正月、念仏の信仰一つをもって浄土宗という一宗を開かれてから、ちょうど八百年に相

当する記念すべき歳であるからであります。宗務庁・総本山・大本山等は、この記念すべき年の慶讃のために数年前より、その準備を進め記念事業等をお待受けをして居ったのであります。全国の門末寺院に於ても、記念に本堂や庫裡等の改築をして、お待受け法要を修する所が多く、私も招かれて巡

錫親教する日が多くなりました。

昭和四十七年十月にはハワイ浄土宗教団の招きで、ホノルルにある別院を始め、各島に散在する浄土院十五カ寺を巡錫しました。ハワイへは宗祖の七百五十年の御遠忌のお待受け法要のため、昭和三十四年に参りましたから、今回で二度目の巡錫でありました。更に今回はハワイの巡錫を終えて、米国本土に渡り、ロスアンゼルスにある北米浄土宗別院にも赴いて、お待受け法要を親修して参りました。本年四月総本山知恩院に於て行われる一宗の慶讃法要には、ハワイからも、北米からも団体参拝があるとのことです。

開宗八百年の慶讃大法要は四月三日の午後一時からの建夜法要に始まり、十日の午後三時からの初夜法要で終る八日間の法要が、このたびの慶讃法要の主体をなしています。四日から十日までの七日間は毎日、午前七時から午後九時からの晨朝、午前十一時から午後一時からの建夜、午後三時から初夜の五座の法要が行われます。その中

で日中と建夜法要とは、本導師の他に左右に導師がつき、三導師の形で行われます。当日の壮観がしのべれます。この初めの法要期間中は、本廟の勢至堂と阿弥陀堂とに於て、午前九時と午後一時との二座の法要が行われます。

四月十一日から十七日までの七日間は、午前六時よりの後夜は総本山の法要部で行い、午前九時よりの晨朝、午前十一時よりの日中、午後一時よりの建夜の三法座が行われます。この七日間は少年会、青年会、婦人会等の宗門所屬の種々の会の行事が行われることになっています。

以上の法要の導師は総本山の門主、六大本山の法主の外、全国から六十名程選ばれています。

四月十八日午後一時よりの建夜より、二十五日午前十一時よりの日中法要までは、例年の御忌法要が続くのであります。そのため四月三日の建夜より、四月二十五日の日中法要まで開宗八百年の慶讃法要は、大体三週間と



申していますが、実際は二十三日間続くわけ
ではありません。

此の法要に参拝する団体の人々の混雑をさ
けるために、全国を大体七ブロックに分けて
参詣して頂き、その日の法座にゆつくり参拝
して頂くよう計画せられていますが、臨時に
お参りになる人々も相当に多いと思われます
ので、法要中は可成りの混雑が想定せられま
す。

当局の受入れ体制は慶讃会奉修事務担当が
定められ、事務総長の公室のもとに総務部と
渉外部とが置かれ、その他には法要部、伝道
部、事業部、参拝部、宿泊部、交通部、経理
部が設けられて事務を分掌することになって
います。事務の機構はできましても、一番大
切なることは和の精神であり、奉仕の態度で
あると思います。

この歳の初めに思うことは、先ず開宗八百
年の慶讃法要のことですが、一日の計
り事は朝にあるといわれています。本年の御
歌会始めの御題は「朝」と仰せ出されていま

す。朝のすがすがしい気分の中に、一日の行
事が行われて参りますことは、最もものぞまし
いことであります。我が知恩院の朝の行事、
ことに元旦の行事について申しのべてみたい
と思います。

日本一大きいといわれています知恩院の大
鐘の除夜の鐘は、大晦日の夜の十二時五十分前
からつき出されます。京都市の寺々の鐘の鳴
ります中に、ひとしお太い音色で鳴りますか
ら、あれが知恩院の鐘の音であるということ
が、よく聞きわけられるのであります。撞木
についた十六本の綱を十六人が一本づつ持
ち、音頭を取る人の声に合わせてつかなか
れば、本当の音色は出ないのであります。近く
の祇園神社で「おけら火」を火縄にうつして
もらって来た人が、知恩院の除夜の鐘をつく
のを見て帰りますので、鐘楼の周囲には多く
の人が集まっています。他の寺々の鐘より
も、間をおいてつかなければなりませんから、
百八の鐘をつき終るのは、元旦の午前一
時頃になります。

知恩院の常在者による修正会の朝のおつとめは、午前五時に起床、五時半に廊鐘が二十一打せられて、法務部員が門主の昇殿の案内に内侍寮へ参り、寮の前の小釣鐘を三打します。それまで門主は内仏でお念仏をしていられ、回願をしていられたのをやめて、両役、両伴僧、常在の大衆を従えて、長廊を渡って、先ず阿弥陀堂に於て回願をし、次いで御影堂（大殿）に於て朝の主なる勤行がつとめられます。朝参会の人々、平素は和順会館に宿泊の信行奉仕団の人々、普通団参の人々が参詣せられるのであります。大殿の御影前の勤行がすむと、左の脇壇にまつられてある歴代上人の霊牌や御木像の前で回願をし、次いで右の脇壇にまつられてある徳川家歴代の御位牌の前で回願をいたします。次いで後門を出た所の廊下で宗祖の御廟を遙拝する。次いで衆会堂の正面の御本尊弥陀三尊を拝し、左の脇壇にまつられてある二祖鎮西上人の御像を拝し、更に堂内の東方にまつられてある文殊菩薩を拝します。次いで大方丈にまつられ

てある弥陀三尊、華頂の宮門跡の霊牌を拝します。大方丈の東方の上段の間に、お鏡餅が屏風で囲んであります。これは皇居に対する御供であります。下段の間から奉拝して宝祚の延長と天下の泰平とを祈念いたします。次いで事務所内にまつられてある濡神大明神の神棚を拝し、炊事場の三宝大荒神を遙拝いたします。これで元旦の晨朝の修正会を終り、次いで古経堂に於て、常住者と年始の挨拶をして、お雑煮で元旦の祝膳につきます。

元旦の十時から総本山としての修正会を行います、市内寺院、宗務庁員、京都教区役職員、京都市内宗門関係諸学校教職員、本山所属の諸講社の人々が参詣せられる。寺務所よりはお雑煮と祝酒、奥よりは蜜柑と昆布との一包が出されます。

元旦の行事は大体右の如く行われ、次いで二日には門主と法務部員とで境内の諸堂巡拝が行われます。先ず本地勢至堂と祖廟に参拝し、次いで歴代上人の御墓、濡髪大明神、経蔵、納骨堂、三門、鎮守社（男山八幡・加茂



明神)新納骨堂(七百五十万霊塔)を巡拝いたします。

諸講社全体の年頭は正月六日に行われ、各講社は五日に朝参会(例月は十四日)七日に木魚会、十日に華頂婦人会、二十四日に華頂講、二十五日に五重同行会がそれぞれ例月の会合に年頭を兼ねて行っています。

元祖法然上人に迫る年

林 靈 法

(大本山百万遍知恩寺法主)

かつて中学の二年のとき、私は友だちと二人で日本アルプスの槍ヶ嶽に登ることにした。

ところが、その途中に先ず二人で中津川から恵那山に登ったのである。この恵那山は東海地方の人々にはよく知られた山で、木曾の

右の如く、本年の新らしい歳を迎えて先ず思い出す開宗八百年の法要のことをのべ、本年のお歌会始めの御題が「朝」とありますので、それに因んで総本山知恩院の朝の行事をのべた次第であります。

華頂山朝のつとめに渡る縁
鶯張りのかたけきひびき

山に入る入口に立ちはばかっている。遠くから眺めると丁度鍋をさかさまに伏せたような、どっしりした大きな山であった。天気の良い日には名古屋からは御嶽山と相對して、東の空にくっきりとその大きな山容が眺められていた。教室の窓から授業中でもいつも眺

めては、私は全く山に憑かれていたのである。
いよいよ金剛杖にわらじ姿で二人は出発した。中津川の駅でおきて、東に大きく立ちはばかっている恵那山麓に入りこんで行ったのである。ところが、この大山は遠方から眺めれば、一応大きな鍋がどしっと伏さった形に受けとれるのだが、中に入っていくとまことに畳々たる山また山で、その頂上は見えなくて見当がつかない。とうとう数時間歩き廻ったのだが、どうしても頂上に通ずる道に出れず、完全に茫漠たる大森林の中に踏み迷うたかたちであった。

夕方近くなる、それに夕立が来て恐ろしくなってきた。中学生二人はびしょぬれになって、右往左往しながら、人影をもとめて道なき雑草の中を切りはらいながら歩き廻ったのである。うす暗くなった頃、漸く谷合いの炭焼き小屋に辿りつき、そこで一人の男に出会った。ところが、この男は全くの裸かのまま、手に薪を割る大きな鉈（なた）を持った恐ろしい男であった。ふるえる気持で、ただ

もう下山したいということで、下りる道をきいたら、案内親切に教えてくれた。恵那山へは勿論登ることできず、結局麓をあちこち数時間に亘って、彷徨していたのである。

× × ×

いま私は寝ても醒めても、毎日元祖法然上人と対座して生活しているのだが、その私の姿勢は、あたかもかつて少年の日に、遠くに見る大山の姿に憧れて、はてしない彷徨をつづけながら、その頂上にのぼることのできなかったのと全く同じなのである。

畳々たる重なり合う山また山の峰をきわめて、これが目的の山かと思うては見るがすぐそのうしろには、また山頂がそびえているのである。偉大な宗教的な人格というものも、まさにそのようなものであるだろう。そのことが法然上人と長いこと対座して来た私にとっては、しみじみと感ぜしめられている。

法然上人は各宗の祖師にくらべると、その著述は大変に少い。日蓮上人などは随分と書きのこされたものが多いが、ご自身もあとに



残ることを意識して書いていられるのである。

ところが、法然上人の場合はまさに念仏者として、全人格を通して念仏弘通に生涯をささげられている。生涯の行動を通じて、この大地に念仏の真理を書きのこされたのである。だから、その念仏によって鍛えあげられて行った宗教的人格に切り込んでいくのでなくは、その真骨頂には接することが困難なことである。だからこそ、法然上人についてはまことに長い間に亘って、誤った理解が文字や著述の上で、宗門の内外に平気で通用していたのである。あれくらい沢山人人によつて書かれた伝記や法語の集録があるにも拘らず、あれほど歪曲された法然像が、平気で世に通用していたのである。法然上人の念仏体験は、日常的な形式論理の立場からすれば、いろいろの矛盾を見るようだが、それを一つの美しい統一の中にめでたくおさめ統べているのである。言わば光の屈折によって生ずるいろいろな色彩を一つに統一し、結晶している。

美しい水晶体なのである。あたかも畳々たる多くの山々を一つに従えた一大主宰なのである。それを一つの屈折の色、一つの峠の再度からのみ眺めて、これで法然上人をきわめたなどと思うのは、とんでもない思い上がりである。

× × ×

「往生要集」や「観経疏」から法然上人が生まれたのではない。法然上人の選択本願念仏があつて始めて、「往生要集」も「観経疏」も、そのところを得られたのである。また法然上人面授の弟子たちに対しては、念仏の元祖として対処せられていたのである。

このような誤解をとり去って、金山として、一つの水晶体としての法然上人の偉大な宗教的人格が、漸くここ数年来あきらかにせられて来たのである。しかも、その大切な仕事は案外宗門外の方によつて開拓されて来ているのは、いささか不思議に思えるのである。しかし、これも長い伝統とか残滓といつたものに禍いされぬ立場からできることであ

るのかも知れない。

浄土開宗八百年を迎える今年こそは、元祖

年頭所感

法然上人の胸奥に、深く深くじかに接し得る年たらしめたいと念じ奉る。

宮本文哲

(大本山善導寺法主)

待ちに待った、浄土宗開宗八百年の記念すべき輝やかしい新年を迎えて、浄土一門は上下を挙げて慶賀の美酒に酔って居る。勿論それもよい事である。然し飲みすぎて酒乱になつてはいけない。寧ろ此の際これをチャンスに、お互に良智良能を出し合つて、宗門百年の大計を建つ可きではあるまいか。

扨て大本山善導寺は、その昔当本山と本末の法縁に結ばれていた、九州一円の本宗寺院の協力を得て、去る昭和四十五年四月、開八

記念慶讃御待受け大法要を盛大に厳修し、其の記念事業として、堂宇の修理、境内の整備は勿論、予ねて地方の要望であつた児童公園を、境内の一角を割いて、これに開八記念善導寺児童公園の名を附し、久留米市に提供したのである。時恰も交通公害に悩み、特に児童の遊び場に苦慮していた最中だったので、当局及び父兄の喜びは意想外であつた。即ち其の反応は忽ち現れ、地方有志に依つて、大本山善導寺奉讃会」が組織され、其の会に依



って境内に、梅樹百五十本が移植され、常夜灯一基が寄進されたのである。

老僧想うに、開八記念行事として、堂宇其他の整備もさる事ながら、それにも増して肝要な事は「人の和」である。即ち地方人士と

年頭所感

— お参りしない仏壇 —

石井真峯

(大本山光明寺法主)

—
だいぶ前のことであるが、早朝のラジオで次のような放送を聞いて今も忘れることができない。放送したのは寺院関係の人だったが、どなたであったか聞きもらした。

あるアメリカ青年が日本研究に来日し、田舎の旧家の一室を借りて生活した。母屋に若

寺院の交流融和こそ最も肝要な事であると信ずるのである。この意味に於て当本山の開八記念行事は、些か其の意を得たりと信じ、自画自讃して目出度き開八新年の御慶を申し納める。皆様、明けましておめでとう。合掌

夫婦が住み、離れに老夫婦が住んでいた。青年は母屋に住んだが、仏壇があるのに気づいた。青年は仏壇には本尊仏と家の先祖の位牌がまつてあることを聞き、日本では各家に教会があることはすばらしいことだと思った。わざわざ教会までゆかなくても、仏に参拝出来ることはうれしいと考えた。

ところが青年に理解の出来ないことがあった。幾日も気をつけていたが、この家の中の教会へ一家の者が参拝する様子がないことだった。

私に不思議に思われることは、若夫婦が母屋に住み、両親が離れに住んでいたことである。普通はその逆が多いようである。だが両親は相当年をとっていて離れに隠居していたのかも知れない。老夫婦が日頃お仏壇にお参りしていたら、若い者も自然にお参りしたことであろう。子供は親の真似をするものである。

二

お仏壇があっても、家の者がさっぱりお参りしないでは困ったものである。しかし今日では多くの家で同じ傾向が見られるのではないだろうか。お仏壇はあっても、仏教の教えないことになる。お仏壇は先祖から引きついだ一種の飾り物になりさがったのである。これは仏教が人の生活の中に十分生きていないためであると言えないであらうか。徳川時代から寺檀の関係が確立され、信仰の有無に拘

らず、どこかの寺の檀家となり、寺は葬儀、年忌の営みによる収入で、経済的に安定して来たため、教化を忘れることになったのではあるまいか。そこに仏教が人間の生活に密接な関係をもった宗教としての存在がうすくなり、その衰退を招くに至ったのであらう。

信徒を増やし、教練の拡張を続ける新しい仏教系の新宗派は、儀式を行わないことはないが、それよりも生活に直結する活動することに重きを置いていくようである。たとえば生活指導、職業指導などである。それらの本部を訪れてみるならば、そこに旧仏教の本部の多くに見られない活気が漲っていることに気付くであらう。旧仏教各派はそれぞれ巨費を投じて伽藍の偉容を整えて活動していることは喜ばしいことであるが、大衆の日常生活と直結しているかどうかの点で考えさせられるものがある。今後の教化の一つとして、仏壇を家族全体の者が参拝するところとして、そこを通して仏陀や宗祖の教えを学びとり、それを日々の生活の指針としてゆけるよ



うなところとしたいものである。

三

私は地方の寺院に半世紀もの長い間住職をして来た。自分では一応住職としてやるべき仕事はすべてやって来たように自負して来た。今日静かに考えてみるとそれは全く根拠のない自負に過ぎないことに気が付き恥かしい次第である。檀家の者がすべて朝夕仏壇にお参りするように指導して来たかという、と

でもそこまで行っていないらしい。仏壇でお経を読む習慣をつけて来たかという、これも覚束ない。それでは自負するものは何もないことになる。私の郷里は日蓮宗の寺院が多いところである加減もあって、朝夕木鉦に合せてお題目を唱える声が聞える家はちよいちよいある。木魚を打ってお念仏を唱える家はほとんどないといってよい。わたし共の篤と考えるべきことと思われる。

浄土開宗八百年の新年を迎えて

一条 智 光

(大本山善光寺大本願法主)

新年おめでとうございます。開宗八百年の新春を迎えて喜びにたえません。皆様、ご承知の通り法然上人が、今より七

百六十年余前、即ち建暦二年正月二十五日におかくれになりましたが、そのお残し下さったお念仏の教えは全国津々浦々に広まり、多

くの人々の心に奥深く信じられております。これは偏見に浄土の教えが時機相応である証拠であります。法然上人は御遷化の前に「跡を一廟にしむれば遺法あまねからず、余が遺跡は諸州に遍満すべし」と、御弟子の問いにお答えになつております。この御心を体して、お念仏を広めて行くことが開宗八百年を迎えた私共僧俗の心がまえであり、法然上人への報恩行であります。

今日の時代は科学技術の進歩、産業経済の高度成長は驚異的なもので、日々夜々報道せられることは、子が親を痛め、親が子を痛め、道義の頹廃、犯罪の激増、唯々戦慄を覚えるのみであります。丁度法然上人が立教開宗された時代と今日とはよく似通っているといわれるが、それは人心の帰趨を失っている点であらうかと思ひます。

法然上人の御修業時代の仏教は、かざられた人即ち特権的な仏教でありました。たまたま今から約八百年前保元平治の内乱、源平の争いにより国内は混乱を重ねて麻の如く乱れ

た時代に、法然上人は唯阿弥陀仏に帰依し奉る純心無垢の信仰によって、当時の特権的な近より難い仏教界に他力念仏という巨弾を投じて、厭世的大衆に救いの大光明を放たれたのであります。即ち出世間的な仏教が民衆の生活の中に他力念仏という型になつて開放されたのであります。上人はいつも御仏と共にいまして仏の救済力を絶対に信仰され、行住坐臥念仏の中に生活をされたのであります。斯様な深い信念を以て混乱の時局をお救いになられたので、そのみ教えは燎原の火の如く拡がり伝えられて、今日開宗八百年を迎えたのであります。

よく今日の時代は、なにかが狂っているといわれますが、その「何か」が心の柱、生活の土台であります。今日誠に疎かにされている点は心の落つきを求めるということでもあります。日々夜々生活が複雑化し周辺が混乱して参りますと、自分自身を見失つてしまします。私達日常生活に於て最も心の落つく時、精神の安定する時は、み仏の前に端坐合掌し

た時であります。仏前に念仏称名した時、たとえ一時でも大きな安らぎを覚えます。その心の静けさが自らを省みる気持を呼び起すので、自分の成し方を反省し現在の立場を見つめ将来の行く手を考えて、善きを延ばし悪しきを振捨てて、理想の世界へと前進したいものであります。願くはお念仏によって兎角汚れがちの心を清め、心の豊かさ温かさを養いたいものであります。

自分一人の解脱を求めた旧来の仏教が、法然上人によって「願共衆生」の旗印の下、皆諸共に仲よく幸せになろうと、この他力の念仏が開かれたことは何と幸せなことでありましょうか。

あらゆる障害をはらいのけて、平和に徹せられた法然上人の御生涯をお偲び致し、その

心を心として日々感謝の中に喜びの生活を致したいものであります。法然上人の御歌に

草も木も枯れたる野辺にただひとつ

松のみのこる弥陀の本願

と詠ぜられておりますが、末法万年にしてあらゆる宗教が減びる時が、よしやありましても念仏のみ教えは永遠不滅と、この御歌からも御信念のほどが窺えます。

正に今、開宗八百年を迎えます私達は、浄土の流れを汲むことの出来た悦びと幸せを感じ、一層念仏信仰の輪をおし拡げて、祖恩に報いたいと存じます。その実践こそ、開宗八百年の記念大行事をして意義あらしめるものと、新年にあたり私自身に云いきかせております。

皆さん共に奮気致しましょう。

合掌

年 頭 に よ せ て

新
春
対
談



宝仙女子短期大学教授
紀 野 一 義



総本山知恩院執事長
鵜 飼 隆 玄

|| 開宗八百年によせて ||

法 然 上 人 の

念 仏 信 仰 と 現 代

僧 侶 の 自 覚 と 使 命

鵜飼 まず申しあげたいことは、僧侶が僧侶に還れということとです。僧侶でありながら僧侶たることを忘れ、寺院に住みながら宗門のことを考えない宗門人が、あまりにも多すぎます。この僧侶であることを自覚し、そこに還ることこそ、開宗八百年への一番大きな意義となると思います。

紀野 僧侶として何をなすべきか、今日ではいろいろとなさ

る方々がおりますが、法然上人の申された雑行を捨ててのこと、これが今一番必要といえるでしょうね。

鶴飼 教団や寺院の維持運営は、時代によりその方向、性格は変化すると思いますが、それはあくまで教団を基盤とした変化でなければなりません。しかし今日では、寺院住職の生活が基盤となって変化しているようです。昨秋ブラジルを訪問した折、歓迎レセプションにサンパウロ州のナテウ知事以下、市長、軍司令官など行政府の幹部多数が出席してくれました。これは現地行政府の方針、つまり一宗教団体主催の行事には出席しないということから考え、全く異例のことであり、初めてのことであったと関係者達は驚いておりました。

これは鶴飼個人歓迎のためではなく、長谷川良信先生の日伯寺を中心として、心骨をさげられた子供の園精薄施設、社会福祉施設などの生きた仏教に、いかに期待しているかをうかがい知ることができました。つまりそれまでの各宗開教団体は、現地邦人に対する葬儀儀礼等の權威づけの活動はあったとしても、民衆の求めるものに欠けていたというのです。

こうした意見は、日本においても多く聞かれることですが。**紀野** カソリック系の上智大学では、昨年創立六十周年を迎えました。大学当局は普通の記念式典はせず、何か意義深いことはないかということで、仏教に関する連続講演会を開

催しました。私はその中の日蓮を担当しましたが、学校当局、神父、尼僧、学生など多数が聴講していました。その後、修道院でも話す機会がありました。いずれもそれは熱心に聞くのです。今の形式化した宗教のあり方では、何かものたりない、いけないという危機意識のようなものを感じ取ることができましたね。

生きた念仏

鶴飼 昨年の夏、ハワイ大学のセミナー「鎌倉仏教研究班」の方々が三週間知恩院で宿泊、研修していましたが、この中にカソリックの尼僧が一人おりました。カソリックでは原則として、その土地にある教会に宿泊すること、この尼僧は河原町にある教会へ泊りに行きましたが、翌日知恩院の方が良いということで、以後こちらに泊られました。ここではどのような人でも差別しないということで、同じような待遇をしましたが、それは熱心に研修され、帰国しました。ブラジルからの帰途、ハワイで歓迎会を催してくれましたが、その折日本各地の仏教施設や活動ぶりを拝見したが、自負ではありませんが知恩院が一番であったといっておりました。たまたま知恩院では、晴天講座、子供奉仕団、写経会な



ど夏休みの各種の活動のさかりの時期であったためでしょうが、これは余談になりますが、この暁天講座のあと今年から粥を出しておりますが、これは日本のオートミールだと説明したところ、多くの人々と一緒においしそうに食べておりました。これを見るまでもなく、わずかな期間ではありましたが、実のあるたのしい思い出となったようです。

紀野 私は東京池上の本門寺で話す機会が多くありますが、在家の方には非常に熱心ですね。そして絶対的な素直さを持つております。これに引替え僧侶の方々は専門家という意識があるためでしょうか、そうした気持が欠如しているように見受けられますね。

鶴飼 それは僧侶が絶えず自分を中心に想定し、判断するためだと思います。在家の方はその教えられた、聞かされたものが宗教であり、信仰であるとダイレクトに受けとめ、実行されますので、そこに大きな差異があるということでしょうね。

紀野 先日、法然上人が遊女を教化された昔を偲びたくて室の津を訪れました。あたりを散策しましたが、今日でも普通の民家として受けつがれている、低めの住いを見るにつけ、どこことなく悲惨な様を思い知り、胸につまるものがありました。ましてや遠い昔、法然上人が流罪の途の折教化された頃

は、それは私たちの想像を絶するものがあつたと思われまし、だからそうした中にこそ、本当の生きた、真剣なお念仏ができたのではないかと考えました。

鶴飼 そうですね。昔は真剣なお念仏であると共に生きることに真剣であつたと考えられます。今日のような享楽的な生き方ではなく、その日その日を生きぬくことが大きな目標であつたと思われまふ。

テレビ文化の追放

紀野 私は、テレビを家庭から追放しようという運動を計画中ですが、育ちゆく子供たちの将来のために、寝ても醒めてもテレビという風潮に、一つの警鐘となればと思っております。

鶴飼 これは全国的な傾向ですが、地方での寺院の夜間の説教などの集りが大変悪くなり、中止を余儀なくされていると聞きます。これは夜はテレビの娯楽番組の方が良いという、享楽主義的な生活が身についてきているためでしょうね。

紀野 この享楽的な面と共に、今日では観想力がなくなつてきていないでしょうか。法然上人に多大な影響を与えた人に恵心僧都がおられますが、それはその教えやことばからの影

響だけでなく、恵心僧都自身が持つていられた浄土などを観想するといったような力、それが法然上人に綿々と伝わっていると申すのです。しかし、なかなか観想することが困難である人々のために口称、専修念仏という方法を示されたのですが、そこには法然上人の念仏を掘められるための、卓抜とした力のようなものをうかがい知ることができると申します。

鶴飼 こうしたことと共に、今日では經典を平面的に読みすぎると申します。これは特に学者の方に法然上人がされたような、立体的な解釈方法をお願いしたと考えます。たとえば指方立相ということをとれば、大衆に対する方便論のみの面が強調され、その根底にある本義が忘れさられています。また積尊ご生誕の折の言行七歩にしても、実際には困難な言動であるにもかかわらず、まことしやかに伝えられている。これをどのように理解させるのか、六歩は罪惡凡夫の六道をあらわし、七歩目は仏の世界を指す、そして積尊は生れながらにして仏の世界にあつたのだというような見方、こうした方法で經典を読んだならば、また違った意味の興味ある解釈が得られると思ひますね。

底抜けの素直さ——純粹な生き方——

紀野 今のご意見は大変おもしろい考え方だと思えます。確かに法然上人の生きられた中世の頃、人々はすべての面で絶対的な素直さがあり、たとえば西方に極楽があるといえどもそれを信じ一心に拝んだ。事実はともあれ熊谷蓮生房のように東国に向う折、馬の鞍に逆さに乗って行ったという、そうした純粋な生活態度をうかがい知ることができます。

鶴飼 徳川時代までは、そうした生活ぶりが見えますが、以後科学的な教育を受けた人々は、何かにつけ理屈を表面に出してまいります。こうした人々を導くためには、やはり理屈をもって教えねばと考えます。

紀野 確かにいわれる通りです。私も絶えずそうした心持ちで対処しておりますが、この反面理屈ぬきの素直さを要求されることもあり、この点を打ち出すことも考え、たとえば集会等の読経は、読みくだし文はやめ、あえて漢文の棒読みをしておりますが、大変好評です。

鶴飼 私共でも子供達の音楽法要の中で、四誓偈を音訓両方でやらせ、どちらが良いかと聞くと言読みの方が良いというのです。理由はどちらも分らないということと、お坊さんや家で祖父母などが読んでいるのと一緒にだからというのです。

この意見を聞くまでもなく、念仏を称えるまでの地ならしとして、理屈をいう者には理屈で教えますが、結局はいくら本

が出版され、それを読んでも、また話しを聞いても、身にはつかず信仰は高まりません。そうした心持が行動にあらわれて来なければ、本当の信仰にはならないし、身につくものとはなりません。ところが僧侶が儀式を行なう場合、そうした感覚はありませんし、ただ形式的な自分達だけの作業になりがちです。あるテレビで石原慎太郎氏との座談会の折、彼は第一声で新興宗教も既成仏教もだめである。けれども日本を教えるものは仏教以外にない、その仏教は教団や寺院にあるものではなく、經典の中にある仏教である、というようなことをいつていました。私はこの意見にある種の共鳴を覚えたことはいふまでもありません。

地獄を通りぬけて極楽をみる

紀野 要するに仏教の理解の方法が、その教えの広汎なるが故にまちまちすぎることもあるでしょうね。

鶴飼 在野の人達からこうした意見が出ること自体、私たち宗門人は大いに反省しなければなりません。卑近な例ですが、法式一つをとっても声の高底はまちまち、節はバラバラ、これで平氣でいる。何事にももっと真剣に取りくまねばならないでしょうね。

紀野 それは僧侶の方々が、本当の地獄を通じて来ていないためではないでしょうか。生活といえど中流以上の生活が保障されていますし、何ら不安の材料がないのです。私は浄土三部経の現代訳をした折、一字一句細かく調べあげ、これは大変すばらしい經典であると、その持つ深さに改めて魅せられました。ここに至るまで相当の努力を強いられました。この例であてはまるかどうか分りませんが、何事をするにしてもきれいなことではすまされない、地獄を通りぬけることによつて、本当の極楽に到達できるのではないのでしょうか。

鶴飼 これは今の僧侶になるまでの教育方法にも原因があると思います。それは通信教育でも受けているようなもので、そこには体験的なものがありありません。そして僧侶の僧侶たることを知らないままに布教生活に入ることになる。そうした温床的な感覚でものを見ることになりますから、自ずと甘い考え方になるのです。今こそ原点に還つての僧侶教育が必要でしょうね。

法然上人にみる真の日本人

紀野 その通りですね。いうなれば在家の人々の方が地獄の生活を通じて来ています。かねてより私は、日本人らしい日本人は中世に見ることができるといっておりますが、これは

法然上人に代表される、自分の納得のいく生活のために周囲に惑わされることのない、純粋な生き方を見ることができからです。それまでの考え方であつた妄念の凡夫は絶対に救われることはない、いや救われるのだといった、全く矛盾する考え方が法然上人によつて、見事に解決されたことに大きな意義を感じずにはおれません。だからこそ、よく対比される日蓮上人はその行動において、天台宗をすて、法華経をすてたとして激しく法然上人を攻撃し続けておりますが、逆にその影響力が大でありすぎた故に、敢えてそうした行動をとられたといつても過言ではないと思います。

鶴飼 それは鏡に写つた己れを見て反省するの論理で、自分の教えた仏の道が信者の上に立派に生きる、そこで己れの道を反省する。こうした心がけが教化者になければならないということだと思ひます。信者の話しを聞いても、それを抽象的に受けとめ、自分の宗教体験の中に組み入れないのです。法然上人は直接民衆に触れることによつて、いよいよその信仰が強くなつていかれた訳です。こうした法然上人の人間体験の上にもとづいて建てられた浄土宗でありますから、私たちも概念的な上にもとづいた信仰ではなく、体験によつた純粋な信仰、生活の中にじみ出てくるようなものになさなければならぬと信じます。

虎年を迎える

安居香山

(大正大学教授)

先年の秋、九州での学会のみぎり、太宰府の天満宮を訪れ、更に足を延して観世音寺に参詣した。天平十八年(七四六)完成したとされるこの古寺も、今はさびれて僅かに金堂、講堂が破れた姿で残っているだけである。

かつてはここに日本三戒壇の一つがあり、東大寺、栃木の薬師寺と並んで、僧尼の為に戒壇が設けられていたが、今はその礎石のみが、歴史を語っている。

ここには立派な宝物館が建てられ、重文の馬頭観音が、雄大な姿を今に止めている。私もまたこの宝物館を拝観してきたが、数々の陳列品の中に、珍しい鏡を発見した。それがここに掲げた拓本である。

直径十九センチもあるこの銅鏡には、ガラス越しにはあるが、誠に珍しい模様が浮き彫りにされ、青銅色に色どられていた。この図は、左に読んでいって、「禽獸魚竹草樹合璧金勝並出瑞図」と書かれている。瑞祥を彫りこんだものである。瑞鳥や瑞獸が出ることは、吉兆として喜ばれ、天下が和楽するきざしとして、中国や日本では、古くから流行した思想である。

ここに刻まれている瑞祥は、その中でもつがいであらわれる瑞祥で、比翼鳥、連理樹などはよく知られている。二羽の鳥の一つの羽根がくっついているのが比翼の鳥で、二本の木の枝が一つになっているのが連理樹である。すべてこれらは瑞祥で、ここには十二の瑞図が刻まれている。大変めずらしいもので、聞けば奈良朝のもので、天蓋の真中にはめこまれていたものであるという。私の専門にし

ている緯書思想と極めて関係が深いので、特に住職に依頼して拓本にとってもらったところ、送られてきたのが、ここに掲げたものである。

ところで、私は瑞祥図ばかりに気をとられて、更にその外周りにある絵に気がつかなかったのであるが、拓本になってきたのを見ると、なんとこれが十二支の絵である。しかもそれが、「並出瑞図」とされるように、どれもつがいになって描かれている。これも又珍しいもので驚いた。これは字とは反対の右廻りで、ね、うし、とらといった順に並んでいる。

十二支は、中国では已に紀元二世紀頃から動物名に当て行われていたので、日本で



も奈良朝頃には、中国から伝来してきて行われており、珍しいことではないが、こうした形で銅鏡のかざりに用いられていることは、珍しいことである。これらの動物は、年々を飾る年の動物であるが、又それなりに、その年々を占う大切な動物である。瑞祥にあやかっ、ここにっがいで刻まれているということは、やはり年々の安寧と、繁栄が祈念されて、こうして刻まれたものである。しかもそれが、天蓋の中心にはめこまれていたということは、当時の人々が、これに吉兆の願いをこめて作られた心根が知られてうるわしい。

それにしても、今年は、十二支の中でも百獣の王者にも

比せられる虎の年である。当然人々は、猛虎と表現されるように、猛々しい、荒々しい動物の姿を思い、今年はそのような年になるのではないかと、危ぶんでいられる人も多いことであろう。十二支は、それなりに不思議とその年をあらわすものである。特に昨年末から、石油危機にあおられて、何か戦時中のように緊張した、切迫した空気が流れていただけに、虎年を占って、更に危険な年になるのではないかと心配している向きが多い。

しかし、虎は、元来、猫科の動物で、どこことなく猫のような可愛らしい、柔和なところがある。ひとたび怒号すれば、百獣をちぢみ上らせるものであるが、普段はおとなしいものである。とげとげした年末を送ってきただけに、底力はあるが、表面的には柔和なこの虎にあやかって、新しい年の門出をすることとしたい。

「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」という諺があるが、何も名を残すことだけが人生ではない。それよりも、本当に人間らしく生き、たとえ一隅を照らすだけであっても、本当に満足して生き、死にできる人生を送りたいものである。それが、結果的には、又名を残すことになるのである。堂々とした風格のある虎の自然な姿こそ、今年を生きる手本である。

お願い

新年の御祝詞を申しあげます。会員各位におかれましてはご平
安な新年をお迎えのことと存じます。

弊会も各位のご厚情のもと、本年は創立四十周年を迎えました。
時あたかも浄土宗開宗八百年の正当年にあたり弊会も一層の
飛躍をと考えております。

さて、この度諸般の事情により今年度より年会費を左記に値上
げいたしました。事情ご賢察の上ご協力の程お願い申し上げます。

新年会費

一、五〇〇円

選釋集講詠

第十一章段

釈尊もただ念仏する人のみを讃う

た

大谷 旭雄

(大正大学専任講師)

まえの第十章では阿弥陀仏がみづから念仏する人の前にあらわれ、念仏の実践こそ、仏のうちたてられた誓願の意にびたりと一致するものであるとして、念仏行をたたえられたのですが、ひきつづいて、この章では阿弥陀仏の慈悲救済の道をひろく紹介しようと出現された大聖釈尊もまた、ただ念仏を修する人のみを讃えて、念仏を勧められていることを明らかにされています。

ところでこの第十一章段の組み立ては他の章段と同様、証拠となる引文と、私釈段とから成っています。ここで引かれた引文は『観無量寿経』、この経典が未来に普及することなどをのべる、いわゆる流通分と、この経文を善導大師が注釈された『観経疏』の文とですが、まず、『観無量寿経』の流通文というのは

若し念仏するものは当に知るべし。此の人は即ち此人中の弥陀

利華なり。観世音、大勢至菩薩、その勝友となる。当に道場に坐して諸仏の家に生る。

という部分で、この意味は未来の人々のために残しておく法門は念仏のみであり、この尊き念仏を修する人はちやうど青、赤、黄、白というとりどりの蓮華のなかで、白蓮華（弥陀利華）のみ、ひとり秀いでているようなものであり、また念仏する人には観音・勢至などの菩薩がつねに同伴し、勝友となつて護り、ついには諸仏のまします家、つまり浄土に往生することができる、ということです。つぎに引いた善導大師の『観経疏』には念仏三昧を修する人がうける功德利益は他のどんな雑善にも超え、まさり、たぐいえないものであるというのが釈尊の真意であると説明され、さらにその意味を経文にそつて五つに分けて詳説された善導大師の説明が引かれています。



がように、法然上人はこれらの經と論を論拠として引き、さらにその主旨を徹底させるため、みづからの信念にたつて私釈段の説明をなされるのですが、その要点はおよそ以下の四点にしぼることができまうので、それらを中心として法然上人のご説明をうかがってゆきたいと思ひます。

一 釈尊もただ念仏する人のみを讃えり。

まえに引用した『觀經』の流通方はとくに余行を修する人と比較せず念仏者を讃えられているようですが、この經文を解釈された善導大師は雑善を修する人と念仏者とを比較した上で、念仏だけを讃えられたものであるといわれています。このような疑問について法然上人は善導大師のいわれるような意義は經文自体の文裏に秘め隠されていると指摘され、その理由として、『觀經』は定善・散善などの諸善と念仏行とが併説されているが、その一番最後の流通分にいたつて、ひとり念仏者だけをとりあげて芥陀利華（白蓮華）にたとえて讃えられているのは、釈尊が余善余行と対比しながら念仏の功德利益を顯わそうとなされた証拠であるといわれています。また法然上人は善導大師が念仏者を讃めたたえて人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人といわれたことを引いて、人中の好人というのは劣惡の行を修する人に対して念仏者を美めたたえた言葉であり、妙好人というのは雜行のような蠱末な修行をするものに対して念仏者を称えられた言葉であり、上

上人というのは下下に対して念仏者を讃えられた言葉であり、希有人とは種々の雜行を修するありふれた常有的人に対して念仏者を嘆じられた言葉であり、最勝人とは往生の修行として最も劣る行を修す人に対して念仏者を美めたたえられた言葉であるといわれています。つまり、これらは余善余行を修する人と念仏者とを比較して、念仏者を美・称・讃・嘆・褒されて五種の讃辭をのべられています。これを五種の嘉善といいますが、浄土宗の僧侶やその信者に与えられる番号はここに溯源するのです。

二 念仏は極惡最下の人のために説く極善最上の法門なり。

さきにのべた通り、念仏が最勝、上上の法門であるなら、『觀經』に説かれる九品の行法のうち、最もすぐれた機能をもつたものが修する上品上生のところでこの念仏が説かれるべきであるのに、經典では最劣のものが修する下品下生のところにこの念仏が説かれています。こうした疑問にたいして法然上人はすでに第四章段のところでも述べていますが、念仏はたしかに下品下生のところに説かれていますが、實際は下品という特定のもののだけが修するものではなく、ひろく九品全般にわたり、上品にも、中品にも通ずる実践であるといわれています。ところで下品下生というのは五逆という重罪をおかした人を指すのですが、このような重罪を滅除することは念仏以外の余行ではとうていなしえない。ただ本願念仏の功力だけか

これを滅することができるといわれています。つまり極悪最下の人のために極善最上の念仏の法門に説かれているのであると説明されています。さらにこの念仏三昧の薬でなければ五逆深重の病を治療することは難かしく、それは弘法大師の二教論には六波羅密經を引いて、八万四千の法門を契経、戒法、論藏、智恵、陀羅尼藏の五種に分類し、その中で、第五の陀羅尼藏が最上のもので、よく總てを包括するところから、これを總持というが、これにもひつちし、しかもこれを超えた、勝れた功德があるといわれています。

三 念仏は軽重の両罪を兼ねて滅する特効薬 (阿伽陀薬) なり。

經典には極悪最下の人を救うために極善最上の念仏が説かれていることは前にものべました。しかし『觀經』には念仏が説かれるのは決して下品下生だけではなく、それよりも勝る下品上生にも念仏を説いています。このような疑問に対して法然上人はこの下品下生の人は十惡の輕罪をおかした人といわれ、ここに念仏が説かれるのは念仏三昧には輕罪、重罪を兼ねて滅除し、一切の罪障をことごとく治療する力をもつからであり、これに対して余行では輕罪は除滅しても重罪には及ばず、あるいは一罪を滅しても、二罪となると除滅しないといわれています。そういう意味で念仏三昧は別に王三昧ともいわれ、たとえばそれは万病を治療し、不死の特効薬といわれる阿伽陀薬にも相当するものであるとして、念仏三昧を讀えら

れています。

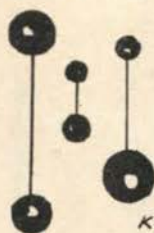
四 念仏は現在に生き、いま念仏する人に、 そして未来にも利益あり。

(現当二世の利益)

現在に生き、いま念仏する人には觀音・勢至が影のごとく、かたどきも離れず影護していただける(現益)利益をうけ、また命終ののちには必ず阿彌陀仏の淨土に救いとられて往生させていただける(当益)利益をうけることができるのですが、これを現・当二世の利益というのです。これに対して念仏以外の余行では決してそのような現在・未来に通ずる利益をうけることはできないといわれています。さらに法然上人は道綽禪師の『安樂集』を引用して、現在に生き、いま念仏する人はまず彌陀の護念にあづかり、命終ののちに必ず淨土に往生できる利益(始益)と、生前にひたすら阿彌陀仏をたのんで専念し、淨土に往生した人だけが、不滅に現在する阿彌陀仏のすがたを拝み見ることができる利益(終益)があるとされています。つまり、念仏三昧には余行のなしえない現・当二世の利益と、始・終の両益などすぐれた積極的利益があることを明らかにして念仏三昧をたかく評価され、讃えられてこの第十一章段をおわっています。

○
先日、列車のなかで、中年の婦人と隣り合せて乗りましたところ、この人はよほど話すぎとみえて、盛んに私に話かけで来られます。私も長旅でいささか退屈しておりましたので、黙って聞いていましたが、その会話のなかに世間の人び

信仰と幸福



藤原明勲

(埼玉県戸田市在住)

との宗教に対する理解の程度がしのばれて、まことに面白いことがありました。

「あなたさまは何の商売をしておられるのですか」

「私は僧侶です」

「はあ、やっぱりそうですか。頭の丸いところを見ると、

お坊さんらしい。洋服を着ていられるところを見ると、そうでもないらしいし、一体どちらだろうなあと思っていたところですよ」

「どちらまでおいでですか」

「青森の方へ参ります」

「何のために行かれますか」

「宗教のお話をしに行くのです」

「どんなお話をなさるんですか」

「お念仏をおすすめに参ります」

すると、この婦人は膝をのりだして

「仏様を信じたら、どんなご利益があるのでしょうか。お

念仏を申したら、どんな良いことがあるんですか」

と尋ねてきました。この婦人の質問の言葉を聞いて、私は、

これが今日の一般の人びとの宗教に対する理解の程度なのだろうかと思つて、大きく溜息をつきました。

現代でも、世の中の宗教を信じていると思つている人びと

の中には、病を治し、金を儲けさせてもらいたいがために仏を信じ、神を信じている人が、かなり多いということです。

多くの人びとは、何等かの現世の幸福を得るための方便として、神を信じ、仏を信じているようです。

しかし、これは宗教を信ずるものの正しい態度ではありません

すまい。功利的な信仰は、神仏を向うにまわして、損じや得じやの商売の取引をしているのと何等変わりありません。自分の思い通りに行くときには、神仏を有難く思いますが、調子がよくいかないときにはそれも神を恨み、仏を恨む心となるのです。「かなわぬときの神だのみ」は、やがて、「しりくらえ観音」という心もちに通じます。何等かの幸福を得るための方便としての信仰、功利的な信仰は、思い通りに行くときには、嬉ぶけれども、思い通りにならないときには、望を失ったといって悲しみのどん底に沈む心です。順境には歓喜するが、逆境には悲観する心です。それでは決して浮沈常なき人生の荒波を乗り切れることはできません。

○

真実の信仰は、富を与えられたいがために信ずるのでもなく、病を癒してもらいたいがために信ずるのでもありません。信仰は決して何かのためにせんとする功利的なものであってはならないと思います。信仰は私の小さな欲望をもって、仏を動かそうとするものではなく、私の願いを根本的に知りぬいて、その私を救わんと誓いたもう御仏の慈悲なるみ心のままに、すべてをまかせることであります。何ら悔ゆるところなく、ひたすらに御仏の大慈悲に打ちまかせてゆくの

法然上人が、「たとい頭をはねられても、念仏だけは申さぬわけにはいかぬ」といわれて、八十歳近い老齢をもって流罪に遭われ、はるばる花の都を離れて配処の月を眺める身となられたのは、まさに真実の信仰の道をあゆまれたからです。

「ただ一向に念仏して」とは、念仏は人間の小さな欲望を達するための方便に使用されるのではなく、念仏そのものに無上のよろこびと幸福とのあることをいいきられたものなのであります。

真実の信仰生活は、御仏の大慈悲に満足し切った絶対安住の境地ともいえましょう。この信仰の立場に立つとき、悲しみもよろこびも、苦も楽も、すべてが仏の大慈悲をよるこぶ動機となり、仏の大恩を感謝するところにもなるのです。

「念仏は無碍の一道」ともいわれますが、「無碍」とは、「さわりがない」ということです。信仰にはいっても、人生には、さわりは有り通しです。いま「さわりがない」とは、そのさわりが、さわりにならないということでしょう。それは、すべてが「おかげさま」の心もちに転ずることを意味します。「さわりなき、おかげさま」の生活こそ、真実に幸福な生活ということができます。



福田行誠上人

念仏人と歴史

大橋俊雄

(時宗文化研究所)

一

行誠上人が在世のころ、ある人が「日本には一人半の僧がいる。そのうちの一人が行誠、その他あらゆる人をひとまとめにして、やつと半人だ」といったという。もちろん、これは極端な思ひきった発言であり、当時京都泉涌寺の旭雅、東京駒込の智曇といえ、学徳ともに高く、大学制度のなかった当時のこと、その人を慕つて千里の道を遠しとせず、教えを受けに訪ずれてきた人がいたというから、行誠一人が高僧だということではない。多くの人がいたに違いない。しかし、一人半の僧のうち一人が行誠だという人がいたというのは、上人の偉大な人格が識者から認められていたことを証する

二

ものであろう。江戸から明治にかけての淆沌とした教界、魔仏叢積の浪風高く吹きよせる世相のなかで、内に対してはくすれゆこうとする教団に警告を発し、外に向つては誤まれゆこうとする仏法を正しい道にかえそうとした、上人の行動はその後の教団に大きな示唆をあたえた。

文化六（一八〇九）年四月、行誠は武蔵国の豊島に生れ、幼少のころ小石川伝通院の伴頭寛淳について受戒した。上人の編集した『徳本行者伝』によれば、行誠は江戸に下向した行者の法談を聞き

たと記している。行者が江戸にいたのは、上人の十二、三歳の時であつたから、そのころすでに出家し、寛淳のもとにいたのである。幼少のころから病気がちであつたが、學問をことさらに好み、手あたり次第に読書したということであるから、さしずめ文学少年というところであつたろうか。文政八（一八二五）年四月ころ京都に遊學し、嵯峨の正定院の立道について『選釈集』とか『大乘起信論』といった、仏教や浄土宗學にとつての基本的な教えを學んだ。

十七歳のときのことである。立道は當時聞えた學徳高い念仏者。上人の『手控』に「おのれは華頂より通いて聞きし、其ころの事を思へば、一合の樹に一斗の水を瀉ぐごとくにて、おのれが器の小さなるに、大教の講談を大人が説しことなれば、樹に入らぬのみならず、少しありしクサレ水までが、皆かえだされて行くごとくおぼえき」と記している。華頂すなわち知恩院の山内に住んでいて、嵯峨まで通つたという。その道のおよそ八キロ。十七歳の少年が、朝のおつとめから掃除など一切の業をおえて毎日通つたということは、並大抵のことではなかつた。しかも、相手は宗内きつての學者、年のころ七十五、六。孫のような行誼、しかもまだ十分仏教の基礎を學びつくしていない身であるのに教えを聞こうとする。どれほどか努力のいたことであろうか。『手控』には、その學恩を深く感謝している。これが將來の、仏教界を背おつた行誼をつくる大きな原動力となつた。

三年の京都遊學をおえた上人は、文政十一年江戸に帰り、翌年伝通院山内の四休庵の住持となつた。このころ伝通院學寮の學頭職を

つとめていたのは覺洲であり、その教えをうける機会にめぐまれ、また上野寛永寺山内の淨名院にいた天台の學者慧澄にも師事して教えをうけた。教えを聞くばかりではなしに、処靜院とか清淨心院にいて、山内の學生たちにも講義したことがあつた。それは浄土宗の者ばかりではなしに、名声を聞いて集まる他宗の人たちにも講義したという。明治から大正時代にかけての天台宗の學匠權田雷斧は『遺教經』の講義を聞いたときの感想を「自分はへいぜい、行誼上人の講義は通俗的であつて、學者むきではないと思つていたので、實をいえば、上人の講義に対して重きをおいていなかったが、今日こうして、この講義の席につらなつて、はじめて上人の學解の深きに驚きいつた次第であります。八宗の泰斗と申されることも、誠にものともなことであると思ひました」と、人たちに語つていたという。

三

明治の仏教にとつての大きな試練は、一は廃仏毀釈であり、一はキリスト教の進出であつた。新政府は神道中心の政策をうちだし、神社官を設けるとともに、僧侶が神社での祭祀をおこなうことを禁止し、僧の還俗をも認めた。僧が肉食することも妻帯することも自由ならば、法要以外に一般人同様の服を着ることもよいという、戒律を無視した太政官の布告を明治五年四月発令すると僧はきそつて布告を実行する。同年九月僧も苗字を名のれといへば、無批判にうけいれる。僧侶みづからが、その手によつて墮落への道をたどらう

としていた。こうした世相をみて行誠は、僧侶が本来の面目に帰るためには、学問的な面からいえば大藏經を読み、仏教の本旨を知ることであり、徳の面からいえば肉食妻帯はもつてのほか、名利をはなれ清貧にあまんじ戒律をきびしく守らなければならない。布告だからといって守ることはない。それは「勝手たるべし」、自由だといっているにすぎないのだ。教界が墮落しつつあった時、こうした布告を出した。政府の方針に同調するかぎり、本来の仏教はほろびてしまいかもしれない。行誠の心配したのは、このことであつた。このときこそ僧侶は奮起すべきだ。「予をもつて、これを云えば真にこれ朝恩なり。いささかも遺憾の念を生ずべからず」、天皇が教界の破滅をおそれ出された、ありがたい指示である、と口をすつぱくして奮起をうながしたが、事實はかけ声のみに終つてしまつた。

キリスト教も江戸時代の終りごろから、日本に進出してきた。進出してきたといつても、それは日本に来てゐる外国人たちのためであつて、日本人を相手にしたものではない。明治の御代を迎えても、依然として「一切支丹宗門の儀、これまで禁制の通り、堅く相い守るべき事」という、高札が立てられていた。邪宗門という文字が、切支丹と書きかえられただけのことであつた。それにしても日本人に布教することはできない。そこで宣教師は日本語を学んだり、外国語を教えたりすることを口実に日本人に接近し、側面的に教えを弘めていった。外国文化が入ってくるようになれば、キリスト教を無視することはできない。外国におしきられて布教を認めたのは、明治六年二月のことであつた。仏教擁護のため、キリスト教を断乎

しりぞけるべきだと主張したのは、同じ浄土宗の僧侶鶴飼徹定であり、『仏法不可斥論』など多くの著述をものして、仏教の有益な所以を説き、キリスト教の排斥運動をおこした。だが世の識者たちは、寺院と僧侶は天下の閑地であり、天下の遊民とみていたので、一向に耳をかそうとしない。かえつてキリスト教擁護の立場をとろうとしていた。このとき行誠も「外教処置法」という一文を書き、

一、不惜身命の意地に住し、公憤慷慨の心志を発して、外教を毀斥せざるべからず。

一、外道の侵入も止むべからざることを知るべし。

一、大慈悲をもつて、外教師の徒を開導して帰仏の心を生ぜしむべし。

の三か条を挙げて、彼は彼なりに真剣にキリスト教の対策を考えていた。

四

上人は明治九年伝通院の貫主となり、同十二年増上寺に入り、ついで十九年三月知恩院の門主となつたというように、いくつかの寺を歴任したが、その間いくたびか遺書を書きのこしている。その一項に「扶宗護法の志第一なること。常に見らるる通り、且トニカタ平日のなぐさみの様に読書すべし」と書かれていた。最後の遺書は明治二十一年三月二十九日認められたが、その年の四月二十五日御忌の最後の日、浄土にかえられた。時に世寿八十三。

年 新 賀 謹

東京都豊島区西巢鴨三二〇—一 大 正 大 学 電話(〇三) 九一八—七三一—代表	京都市北区紫野北花ノ坊町九六 仏 教 大 学 電話(〇七五)四九一—二二四—代表	上宮学園長 小 林 大 巖	家政学園長 三 枝 樹 正 道
京都家政短期大学 京都府宇治市槇島町千足八〇 家政学園高等学校 家政学園中学校 京都市左京区岡崎円勝寺町五	東山学園長 藤 原 弘 道	淑徳短期大学 食物栄養学科・社会福祉学科 東京都板橋区前野町五—三—七	鎮西学園長 上 田 貞 雄 熊本市九品寺三丁目一ノ一
保元寺住職 淑徳高校長 里 見 達 人	精薄施設龍雲学園主幹 日本ボーイスカウト香川第二団隊長 細 井 俊 明 高松市仏生山町法然寺	大正大学梵文学研究室 真 野 龍 海	社会浄化・人間浄化念仏大行進 開八淨青黒衣大結集(四九・三・一四) 竹 田 英 宣

年 新 賀 謹

西 信 寺

栗 本 俊 道

真仏教舎本部会長

裏 辻 賢 洲

福岡県宗像郡福岡町

松原山大善寺住職

菊名山蓮勝寺

柴 田 敏 夫

横浜市港北区菊名町五二一

だん王法林寺

信ヶ原 良 文

京都・三条大橋東詰

北 川 一 有

長 寿 院

東京都台東区鳥越二一十三一十八

正 覚 寺

楠 美 知 行

青森市本町一一一十二

清 岸 寺

原 口 徳 正

東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一一

函館市称名寺

須 藤 隆 仙

沖繩にお念仏の光を
沖繩開教後援会事務局

山 口 諦 存

(自坊・明石市光明寺)

平塚市晴雲寺

塚 田 弘 導

白 幡 憲 佑

横浜市南区庚台

久保山 光 明 寺

年 新 賀 謹

戸川 靈 俊
京都市左京区黒谷町 西住院
大阪工業大学・東大阪短期大学

開宗八百年記念
本堂改修・石垣改修・参道境内舗装
北海道第一教区長
満岡寺住職
奈良大道

室蘭市沢町一〇一七

室蘭市大沢町二一一十

善行 寺

飯島 英 徳

開宗八百年記念本堂落慶

光照 寺

調布市柴崎一一三十八

住職 正本 実 閑

近竜寺住職

松 濤 弘 道

栃木市万町二二一四
電話(〇二八二)二二一〇八〇二番

光 運 寺

飯 田 信 弘

四日市市中部三

教 安 寺

野 呂 幸 進

川崎市川崎区小川町六一二

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料 不要)

浄 土 十二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年十二月二十五日印刷
昭和四十九年一月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮 林 昭 彦

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 関 二 三 男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

年 新 賀 謹

浄土門主 岸 信 宏 京都市東山 知恩院	浄土宗宗務庁	浄土宗宗務支所	大本山増上寺法主 大野 法 道
大本山百萬遍知恩寺 法主 林 靈 法	大本山光明寺法主 石 井 真 峯	大本山善光寺大本願 法主 一 条 智 光	法然上人御降誕之地 誕生 寺 岡山県久米郡久米南町
中 島 真 孝 中 島 真 哉 東京都港区南青山二丁目二六の三八 梅 窓 院	伝 通 院 大河内隆弘 東京都文京区小石川三丁目二四の六	鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤密雄	目黒 祐 天 寺 住職 巖谷勝雄